

九州伝産の旅 vol.6

2022 年

小代焼 ふもと窯

<工房紹介>

小代焼約 400 年の伝統を守るべく、6 袋の登り窯で作品を焼き続けている。燃料には松薪、釉薬となる灰は木、藁と自然のものを使用。「小代焼の伝統を現代の暮らしに調和させ、暮らしの中に光り輝くものを」をモットーに、現在は初代泰秋さん、2 代目尚之さん、お弟子さん含め 4 名体制で日々作陶に励んでいる。

しょうだいやき

小代焼 ふもと窯

日々感性を磨き、顧客ニーズに左右されない自分軸での作陶に挑む

静かな府本の集落で、ひととき職人さんたちの活気が伝わってくる「ふもと窯」さん。小代焼の窯元の中でも最大級の 6 袋の大きな登り窯が特徴です。お父様の泰秋さんの伝統を引き継ぎながら新しい技法にも挑戦されている 2 代目井上尚之さんにお話を伺いました。



初代泰秋さん（右）と 2 代目尚之さん（左）



ふもと窯外観



店内の作品

■ 小代焼の歴史・特徴

起源は、豊前藩・小倉城主、細川忠利の熊本移封にともなって、豊前上野で作陶をしていた陶工源七（牝小路家初代）と八左衛門（葛城家初代）が小岱山麓に移り住み、窯を開いたことに始まります。釉薬の深い美しさと自由奔放な流し掛けの模様は素朴な味わいがあり、ふだん使いの器として暮らしの中で生きづき、その力強い作風は茶陶としても愛されています。深い藍と碧の地に白掛けが溶け込んだ釉薬が特徴の小代焼は、芸術品としての評価の高い焼物です。また、器としての実用性も高く、熊本では五徳焼とも呼ばれていました。現在、荒尾市・南関町を中心に 11 の窯元が、小岱山特有の陶土を原料として古くからの技術・技法を現在まで継承しています。

※小代焼窯元の会 HP より引用・編集。

Q.「ふもと窯」の特徴を教えてください

もともと畑だった場所から採取した粘土と藁灰等を材料に、釉薬を使って模様を描き、登り窯を使って製作しています。釉薬の種類が少ないのが特徴で、主に藁灰釉と木灰釉の2色だけで表現します。シンプルがゆえに、深みがあると言われる。

Q.家業を継がれたことに関してどのように感じられていますか？

父はこれまで多くのお弟子さんを育ててきましたが、お弟子さんと比べて、私は「伝統」という言葉を使うことができ、背負うことができます。それは本当に「ありがたいな」といつも感じています。父がここ府本で窯を開いたことはご縁なので、「ふもと窯」の看板は大切に続けていきたいですね。父は器用な人で、私は残念ながら器用な部分は受け継いでいません（笑）また、父は16歳から陶芸を始めましたが、私は20歳から始めました。陶芸は体で覚える部分も多く、4年の差を埋めるのはとても難しいと感じています。父を超えるためには技術力以外の部分、例えば目やセンスなど、感性を磨き、育てることを意識しています。実は息子も今、鳥取の窯元に修行中です。父が自由にやらせてくれたように、息子も好きにやって欲しいですね。

Q.販売に関してはどのようにされているのですか？

お客様と直接接するのは苦手なので、販売については基本的に取り扱ってくれるお店にお任せしています。ささいなことでも影響を受けやすいところがあって、例えばお客さんから「ちょっと重たい」と言われると、そのことが気になってしまう。実は「重たい」と思う人はごく一部の人だったりするわけですが…。信頼できるお店であれば、その点、本当に必要な情報だけを教えてください。結局、「誰にもでも使いやすい器」というのではないと思っていて、自分基準で作ってみて、それに合う人に買ってもらえれば良いのかなと思っています。

取引先の開拓については、当初は東京方面を中心に営業しましたが、相手にされないことも多く、かなり苦労しました。取引先との関係は、紙切れのない夫婦のようなものですから（笑）、今も常に緊張感を持って対応していますね。

Q.スリップウェア（※）に取り組むようになったきっかけは？

もともと小石原焼の修業先で、竹の道具を使った「ボン描き」という技法が使われており、その技法を取り入れた作品作りをしていたところ、「スリップウェア（※泥のような化粧土で文



スリップウェアの技法を使った作品

様を描く陶器）」にかなり似ていることを知り、スリップウェアに移行して行きました。スリップウェアを始めた頃は、伝統的な小代焼ではないこともあって「まじめにやれ」とかなり批判されました。なので、まずは熊本から一旦離れて、東京方面から売り込んで行きました。尊敬する師匠からは「10人敵がいたら、そのうち9人はいずれ味方になる」と言われ、その言葉を信じてやってきました。

スリップウェアで人気が出たのはその方のおかげですね。スリップウェアは模様に目がいきがちですが、実は楕円のフォルム等、成形にいちばん拘っています。平らな状態で模様を描いて、あとで成形していくのですが、ろくろを使うよりも割れやすく、製作に時間もかかるため、手間はかかります。



スリップウェアの作り方をしてくれた尚之さん

Q.尚之さんが目指している焼物とは？

ふもと窯の2階に様々な地域の焼物を展示した資料館があるのですが、お手本としています。古い作品ばかりで、器用とかただ美しいとか、そういうものではなくて、やはり現役と並べてみると、敵わないところがある。何もなかった時代なはずなのに、何を見てこういうバランスがとれるんだろうと不思議です。「黄金比」と言われるものがありますが、図ってみると黄金比になっていたりするんですね。自分の焼物も近づけたかなと思ったら、その瞬間全然違うことに気づいたり、行ったり来たりで、奥が深いです。一生かかって目指す焼物に到達することはないと思います。だから終わりがなくて、面白さがあります。

Q.薪窯での焼成にはこだわっているのですか？

私自身はこだわっていません（笑）薪窯が一番良いと言われているので使っていますが、薪窯が仮に使えなくなった場合にも作品に影響が出ないように釉薬も考えていますし、粘土も全ていつなくなっても代替がきくように考えています。そういうことを考えるのは好きなんです。でも薪窯はやっぱりおもしろいですよ。「窯の声」を聞けば、どう対応すればよいか教えてくれます。本当に毎回どう仕上がるか全然分からない賭けみたいなものです。失敗することもあるし、想像を超えたものが出来上がることもあります。

Q.最近の取組は？

伝統的な小代焼とスリップウェアを融合させた作品を作っています。嫌いなことにも挑戦すると意外と良かったりしますね。その他には、実際の重さとは関係なく、持ったときに感じる重さというのがあると思うんですが、ここ数年、どこに重さの中心を持ってきたら心地良く手にフィットするかをずっと模索しています。



伝統的な小代焼とスリップウェアの融合

あとは今、実はCM2本に私の器が出演しています。何気なくテレビを見ていたら自分の器が映っていて、自分の子供が巣立って行ったようで、やっぱり嬉しいですね。

profile

窯元名

ふもと窯

場所

熊本県荒尾市府本古畑 1728-1

電話

0968-68-0456

定休日

無休（ただし仕事場は土曜休み）

営業時間

8:30～18:00

Web サイト

<https://shodaiyaki.com/>

※小代焼窯元の会 HP



Q.尚之さんのモットーを教えてください。

「無心」で作るということはないと
思っていて、「考えて」つくることを
心がけています。上手に作っても
なぜか一生懸命作った作品には
敵わなくて、お客様もやっぱりそ
ちの方が良いと思われるんです。
また、細かい技法等はあまり気に
していなくて、「良いものを作る」と
いう風にトップからものごとを捉え



るように心がけています。その点、料理人も大工さんもみな同じだと思っています。焼物は
大量の CO 2 を排出して作るので正直エコではないと思っています。そんな中で、やはり
使ってもらわないと意味がなく、少しでも無駄（ロス）を省きたいという思いはあります。
あとは、いつも怒ってくれる人を大事にしています。お金を払ってでも、自分から喧嘩をふ
っかけてでも、怒られに行きたいです。

Q.今後の目標は？

40代のうちにある程度の技術とリズムを身につけて、50代までに自分自身の言葉で
語れるようになり、70代で自由にはっちゃけたいですね（笑）

Q.小代焼の魅力、府本の魅力を教えてください。

小代焼の魅力は、食器に向くという点だと思います。鉄分が強い焼物なので、硬く丈夫
です。食洗機や電子レンジも問題なく、お客様には、「もし割れたら食洗機や電子レンジ
のメーカーに文句を言ってくださいね」と伝えています（笑）

府本の魅力は、来てもらえば分かると思いますが、静かで、四季折々の風情があるところですね。初窯出しというイベントでは、その場で窯から出てきた出来立ての器を購入
することができます。今はコロナで中止していますが、また再開して、お客様に府本に来て
いただきたいと思っています。

明るく真っ直ぐな印象の尚之さん。お話の中で「感謝」「ありがたい」という
言葉が何度も出てきたのが印象的で、謙虚さや向上心など、明るさとは
また違った尚之さんの人柄の魅力が作品にも表れているように思いまし
た。顧客の顔色を伺ってトレンド商品を作ることだけが正解ではなく、目
指すべき焼物に向かって真っ直ぐに取り組む姿勢や出来上がった作品に
共感する人達が、お客様や取引先として自然とついてくるものなのだと感じ
ました。